

## 2019 年度 大学英語教育学会 (JACET) 関西支部大会

### 基調講演、特別講演、企画シンポジウム発表要旨

#### JACET Kansai Chapter Conference 2019 Summaries

##### <基調講演/ Keynote Lecture>

講演タイトル：英語教育における言語イデオロギーを問う

講師：久保田 竜子 先生（ブリティッシュコロンビア大学）

発表言語：日本語

**Abstract:** 国際共通語と呼ばれる英語教育がグローバル人材育成のもとに、ますます盛んになっている。しかし、教育政策や教育実践は依然として規範的言語イデオロギーに影響されており、さまざまな多様性から背を向ける狭い認識を再生産している。外国語学習を通して学習者の世界観を広げるためには、言語や文化に関する意識改革が必要である。本発表では言語・言語使用・言語使用者・文化などについての認識に横たわるイデオロギーに焦点を当て、標準英語ならびに規範文法や白人ネイティブスピーカーへの固執、文化本質主義、新自由主義的な英語能力観などをクリティカル応用言語学の知見をもとに問い直す。言語教育においてあらゆる多様性を受け入れ推進していくとともに、コミュニケーション力としての英語能力を育むためには、どのような理解や意識が必要なのか、問題提起する。

##### <特別講演/ Special Talk 1>

講演タイトル：Emotions, cultures, and stories: Against the impoverishment of meaning

講師：柳瀬 陽介先生（京都大学）

発表言語：英語

**Abstract:** An assumption penetrating into the minds of the general public due to the widespread use of standardized tests is the notion that multiple-choice format can successfully measure understanding of meaning. This belief leads people to suppose that sense-making is only a common reaction and to regard meaning as definite, static, and monologic. This view, however, impoverishes meaning to the loss of its potential in communication. In this presentation, I argue that understanding meaning is proactive and that meaning is indefinite, dynamic, and dialogic by considering some origins of meaning: emotions, cultures, and stories. Emotion is both biological and cognitive, not just a fixed reaction to a stimulus, but a proactive driver of dynamic meaning. Cultures enable individuals to exploit meaning socially without completely realizing its potentiality; meaning is thus indefinite to its users. Stories as a powerful genre of language use

expand the dialogic nature of meaning in a complex situation. Meaning, therefore, is a bio-cognitive guide to future actions, a social resource to deal with unforeseen states of affairs, and a source of wisdom to thrive in complexity and plurality of the human world. Language teachers need a better understanding of meaning and should be critical of the extensive use of standardized tests.

### <特別講演/ Special Talk 2>

講演タイトル：外国語教育政策研究の理論・方法

講師：寺沢 拓敬 先生（関西学院大学）

発表言語：日本語

**Abstract:** 本発表では、外国語教育政策における研究上の空白領域を問題点として指摘し、対案としてより妥当な枠組みを示す。私の専門分野である英語教育政策に焦点化し、国内外の言語政策理論や研究方法論を批判的に検討する。先行研究には特定の理論・方法論への偏りが見られる。例えば、(A) マクロレベル（イデオロギー）およびミクロレベル（相互行為）の分析、(B) 外的妥当性よりも理論的サンプリングの重視、(C) 政策内容の同時代的な記述・批判といった研究は非常に隆盛している。その一方で、次のような枠組みは（社会科学では王道的であるにもかかわらず）十分に浸透しているとは言い難い。すなわち、(a) メゾレベル、特に国・自治体の行財政レベルの分析。(b) 代表性を備えた社会調査・マクロ統計の分析。(c) 政策過程の記述・批判。とくに歴史分析。後者の枠組みがいかに重要か、公共政策研究をはじめとした社会科学研究に基づいて論じたい。

### <企画シンポジウム/ Invited Symposium>

講演タイトル：大規模スピーキングテストの舞台裏，どこがどう難しいのか？—京都工芸繊維大学の実践より

講師：羽藤 由美 先生（京都工芸繊維大学） 神澤 克徳 先生（京都工芸繊維大学） 光永 悠彦 先生（名古屋大学）

発表言語：日本語

**Abstract:** 京都工芸繊維大学では、学内外の教員と企業との共同研究によりコンピュータ方式（CBT）の英語スピーキングテストを開発し、2014年度から学内で定期実施している。2017年度からはAO入試にも採り入れている。本シンポジウムは、この実績に照らして、新英語入試制度の問題点についての理解を深めることを目的とする。

大学入試センター試験に代わって2020年度から実施される大学入学共通テストの枠内で英語民間試験が利用される。民間試験利用の主目的はスピーキングテストの導入と言われるが、制度

設計が大規模スピーキングテストの内実を踏まえておらず、多領域での混乱が予想される。一方、民間試験の導入に反対する側にも、情報不足に起因すると見られる的外れな批判が少なくない。シンポジウムでは、テストの構成概念（何を測るか）の精緻化、採点の基準や方法、採点者訓練、CBTの運営やリスクマネジメント、テストの等化・標準化、スコアの共通尺度による表示法の検討やCEFRとの対応づけなど、民間試験では表に出ないところで何が行われているかを紹介する。また、それに基づいて、新入試制度の抜本的な見直しが必要であることを指摘し、改善の方法を提案する。